

記録

35ミリ  
カラー／30分  
日・英・独・仏・西・  
伊・葡・インドネシ  
ア・アラビア・タイ・  
マレーシア・露語版

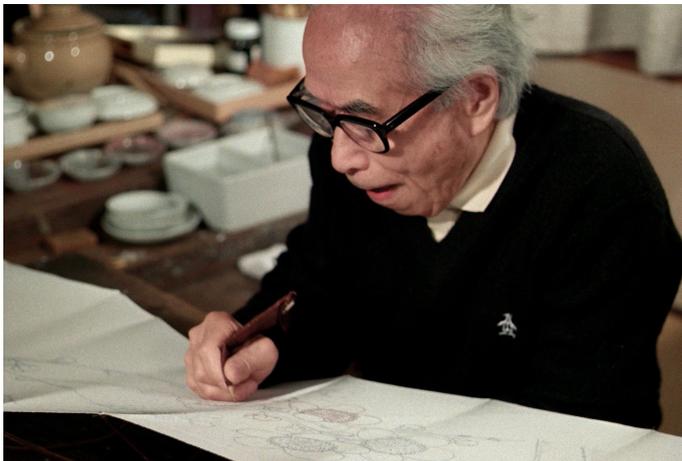
- 企画  
文化庁
- 協力  
東京国立近代美術館  
京都国立博物館

スタッフ

- 製作  
村山和雄
- 脚本・演出  
山添 哲
- 撮影  
江連高元
- 音楽  
長沢勝俊
- 照明  
水村富雄  
岡本健一
- 編集  
中根信也
- 録音  
甲藤 勇
- 解説  
伊藤惣一

文部省選定 日本映画ペンクラブ推薦 1989年教育映画祭優秀作品賞 第28回日本産業映画・ビデオコンクール奨励賞 1989年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第6位

この映画は、重要無形文化財保持者の友禪作家・森口華弘の大胆な構想と工夫を重ねて練りあげた独自の技術が、華麗な友禪の作品を生み出していく過程をとらえ、作家のその仕事に対する執念とひたむきな生きざまを詳細に記録している。



日本人は、昔から自然の花や木を、着物の模様染めて楽しんできた。中でも友禪は、花の衣装の王座を占める。京都は優れた工芸の伝統を受け継いできた街である。森口華弘の工房は、その京都の街の一隅にある。森口の模様の基礎は、絶え間ないスケッチから生まれた膨大な下絵の蓄積である。スケッチの繰り返しの中で樹や花の生命感を掴み取る。作品の構想がまとまると、着物の形に仮絵羽(仮縫い)した白生地に木炭であたりを取り、青花の液で下絵を描く。下絵が完成すると仮絵羽を解いて、下絵の線に沿って糸目糊(いとめのり)をひく。そして青花おとし、呉汁による地入れ骨豆(こつまめ)と続く。これから挿友禪(色挿し)である。友禪は淡い色から挿していく。

森口は30年前のある時、京都の庭園で白砂が光によって様々に変化するのを見て蒔糊(まきのり)の新しい展開を思いついた。苦心を重ねて作りだした技法、色蒔糊を用いて完成した「早春」は、世にでるきっかけになった。そして「菊花文様」「流水」などの作品で、蒔糊による絢爛たる世界を展開した。数々の工程をへて糊を落とす流水の中から、文様が姿を現す。森口友禪の完成である。

「友禪は色が華やかなだけでは駄目だ。着る人の内面の美しさを引き出すお手伝いができるような、女性らしい華やかさを我々作家は追求する」それが、染織作家の原点だと森口華弘は語っている。